Osaka University Knowledge Archive

Title	翻訳による解釈の限定 : Emily Dickinson の詩を用いて
Author(s)	岡部, 未希
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 61-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72813
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

翻訳による解釈の限定
—**Emily Dickinson** の詩を用いて—

岡部　未希

1. はじめに

本稿では、アメリカの詩人、エミリー・ディキンソン(1830-1886)の代表作である、‘Because I could not stop for Death — ’の日本語訳の比較検討を行う。対象とする日本語訳は、(a)中島完(1964)訳、(b)新倉俊一(1985)訳、(c)萱嶋八郎(1985)訳、(d)谷岡清男(1987)訳、(e)亀井俊介(1998)訳、の 5 例である。これらは、それぞれ第 6 連の最終 2 行に着目すると、2 グループに分けることができる。すなわち、I first surmised the Horses' Heads / Were toward Eternity —の surmised 以下を、(X)「馬の頭を永遠に向ける」と訳すグループ(a, b, c)、それから(Y)「馬が永遠に向かっている」と訳すグループ(d,e)である。馬車に関する百科事典的知識を考えれば、2 種類の翻訳が存在するのは自然なことだが、それらは果たして同じ意味を伝えているのだろうか。異なる意味を伝えているとすれば、どちらの方がより良い翻訳と言えるのだろうか。詩の解釈をじっくり考えた上で、(1)詩の解釈に矛盾が生じないか、(2)ST[1]で解釈が複数可能な部分は、TT[2]でもその解釈を読み手に委ねることができるか、という 2 つの観点から比較検討したい。さらに、5 作品の翻訳を比較し、細かい差異についても考える。

2. Dickinson の「死」に関する詩

アメリカ北東部ニュー・イングランドで生まれ育った Dickinson の詩のテーマは、自然、愛、死、永遠、神というような、ニュー・イングランドの詩人にとって伝統的なものが多い。そして、この中で最もよく議論される詩の多くは、死に関する詩である。死に関する詩は複数存在する[3]が、『エミリ・ディキンスン事典』(2007)では、そのうちのいくつかを以下の通りにまとめられている。すなわち、哀歌、慰めの詩、死の場面を描いた詩、語り手が死や、なんであれ死の瞬間の後に続くものを経験しようと試みた詩などである。

さて、伝統的なニュー・イングランドの詩人らは、死を天国における永遠の生と結びつけがちだった。しかし、亀井(1998)によると、Dickinson は死へのそういう埋没ぶりは示さなかった。Johnson 編纂詩集 341 番‘After great pain, a formal feeling comes —’では、大きな痛みの後の心理状態を、死と葬式のイメージで歌い、そのリアリティを冷ややかに凝視する。また、本稿で扱う‘Because I could not stop for Death — ’では、死後、馬車に乗って墓に着くまでのドライブを描くが、一緒に乗ったはずの「不滅の生(Immortality)」はいつしか姿を消してしまっている。まるで自分のヴィジョンを滑稽に描き、面白がっているようだ、と言う。このように、Dickinson は伝統的な詩人とは異なった、ユニークな詩を描く詩人である。

3. ‘Because I could not stop for Death — ’の原詩と日本語訳

死を主題とした詩の中でも、‘Because I could not stop for Death — ’は Dickinson の代表作とも言うべき作品である。1863 年に制作され、Mabel Loomis Todd と Thomas Wentworth Higginson が編集した *Poems*(1890)で初めて公表された。第 2 節でも少し触れたが、この詩では、礼儀正しい求婚者「死」と、「私」の、死後馬車で行くドライブデートが描かれている。第 1 連で出発し、第 5 連までは墓場までの道中を描く。そして、本稿翻訳比較の焦点を当てている第 6 連では、それから何世紀も経つが、馬の頭が永遠の方角を向いていると初めて思ったその日よりも、この何世紀は短く感じられる、と語る。

この詩は非常に有名なため、多くの日本語訳が存在する。しかし、第 6 連に着目すると、翻訳にわずかな差異が見受けられる。以下に、詩の原文と、日本語訳 5 作品の第 6 連を示す。これらの内、本稿で比較検討の対象とする部分は下線を引いている。日本語訳の全文は文末の付録に載せているので、適宜参考にしていただきたい。

---

[1] ST…起点テクスト(Source text)

[2] TT…目標テクスト(Target text)

[3] Dickinson の全詩 1775 編中、death という語を含む詩だけでも約 120 編存在する。

‘Because I could not stop for Death — ’[4]

Because I could not stop for Death —
He kindly stopped for me —
The Carriage held but just Ourselves —
And Immortality.

We slowly drove — He knew no haste
And I had put away
My labor and my leisure too,
For His Civility —

We passed the School, where Children strove
At Recess — in the Ring —
We passed the Fields of Gazing Grain —
We passed the Setting Sun —

Or rather — He passed Us —
The Dews drew quivering and chill —
For only Gossamer, my Gown —
My Tippet — only Tulle —

We paused before a House that seemed
A Swelling of the Ground —
The Roof was scarcely visible —
The Cornice — in the Ground —

Since then — ’tis Centuries — and yet
Feels shorter than the Day
I first surmised the Horses’ Heads
Were toward Eternity —

(a) 中島完**(1964)**訳

それから何世紀がたったろう
だがその一つとて一日より短く思われる
永遠を指して馬を向かわせたと
私が最初に信じたあの一日よりも

[4] 脚韻は、第 1 連以外どれも不完全。頭韻は、1-3 could-kindly-Carriage, 5 knew-no, 7 labor-leisure, 9, 12 School-strove-Setting-Sun, 10 Recess-Ring, 11 Gazing-Grain, 14 Dews-drew, 15 Gossamer-Gown, 16 Tippet-Tulle, 21-23 Since-Centuries-surmised, 23 Horses’-Heads。

(b) 新倉俊一**(1985)**訳

あのときから　何世紀もたっている
だが　なんと短く感じられることだろう
馬の頭を永遠に向けたと最初に思った
あの一日よりも

(c) 萱嶋八郎**(1985)**訳

その時から数世紀たった。けれども
永遠の方に向って
馬の頭を向けたと私が最初に推測した
あの日よりも短く感じられる。

(d) 谷岡清男**(1987)**訳

その時から何世紀もたった
なのに一日より短く思えるのだ
私の馬が「永遠」に頭を向けたと信じた
あの日よりも―

(e) 亀井俊介**(1998)**訳

それから―何世紀もたつ―でもしかし
あの日よりも短く感じる
馬は「永遠」に向かっているのだと
最初にわたしが思ったあの一日よりも―

(a)から(e)までの 5 作品を見ると、第 6 連最終 2 行 I first surmised the Horses' Heads / Were toward Eternity ―の surmised 以下の訳し方に 2 通りあることが分かる。すなわち、(a)、(b)、(c)の 3 作品は、(X)「馬の頭を永遠に向ける」と訳し、(d)、(e)の 2 作品は、(Y)「馬が永遠に向かっている」と訳している。では、何故このような違いが生まれるのだろうか。

4. 2 種類の翻訳が生まれる理由：百科事典的知識

ある語から想起される知識の総体のことを、その語の百科事典的知識と言う(辻、2002)が、(X)、(Y)の 2 種類の翻訳が生まれる理由には、「馬車」の百科事典的知識が関わっている。

馬車に関する百科事典的知識の中には、馬車は人や荷物を運搬する、馬などに引かせる車である・御者が馬に命令し、目的地に向かって馬車を引かせる、などが含まれる。つまり、馬車を引く馬というのは、自分で目的地を決めるわけではない。したがって、「馬がある方向を向いている」ということは、「誰かが馬をその方角に向けた」結果である、と考えるのは極めて自然なことだ。

確かに、私たちのもつ経験や知識から考えて、このような言い換えは可能であるように思われる。しかし、この 2 つは、'Because I could not stop for Death ― 'の翻訳としてどちらも適切と言えるのか。

5. 詩の内容

この疑問に答えるために、まずは詩の内容をじっくりと考えていきたい。

まず、第 1 連では、死(Death)は礼儀正しい青年紳士として、語り手を迎えに来ている。当時のデートの習慣では、男が馬車に乗って愛する女性の家の前に迎えに行ったのだった(萱島、1985)。馬車にはもう一人、不滅(Immortality)が乗っている。不滅は、ここでは監視役の年取った女性の役割を担っている。

次の連に移ると、馬車はゆっくりと走り出す。語り手自身も、これが最後の遠出だと承知しているので、急がないでほしいと思っている。実際に忙しくて彼のために止まることのできない自分の生涯のこの時点で、わざわざ止まってくれた彼、死の思いやりは礼儀正しさの証である。だから語り手は仕事も余暇も全て捨てたのだった(ジョンソン、1985)。

旅の途中、語り手は遠ざかりつつある人生の日常の営みを心に留めている。学校の休み時間に輪になって遊んでいる子供、目を見張っている穀物、沈む夕日を通り過ぎていく。馬車の進行とともに、人生の段階を、若年期、成人期、老年期とたどっていくようになっている(レア、1993)。

第 4 連で、語り手は今や、時と変化の外にいるという実感をよく伝えている。何故なら太陽が、墓にいる者全てを通り過ぎるように、自分たちを通り過ぎたと、訂正しているからだ。彼女は湿気と寒さに気づき、自分が身にまとっている蜘蛛の糸で出来たドレスや、薄絹のショールの薄さを急に意識する(ジョンソン、1985)。tulle「薄絹」は花嫁のベールとして用いられることから、Anderson(1960)は死後の celestial marriage を暗示する、と解釈している。もちろん、語り手のドレスは花嫁衣装ではなく、死装束という解釈もある。

とうとう、地面の膨らみのような House「家」の前で馬車は止まる。ほとんど屋根らしい姿はなく、蛇腹[5]も土に埋もれている。この家とは、語り手が葬られる墓のことである。

第 6 連になると、場面は急に切り替わり、何世紀も経った後に旅立ちの間自分の目に映った事物を思い出す。馬の頭が永遠の方角を向いていると初めて思ったその日よりも、この何世紀は短く感じられる、と語り手は語る。「いつまでも果てし無く続く」という意味の Eternity「永遠」という言葉で、詩は皮肉にも終わりを迎える。また、「馬が永遠の方角を向いている」と surmise「推測」しただけであって、永遠という地にたどり着いたかどうかはわからない。「究極的には彼女が最後に目覚める永遠の世界に向かっている」と解釈する人もいれば、「実際には永遠には少しも近づいていない」と解釈する人もいる。キリスト教の解釈では馬車は天国に行くはずだが、まるで馬車は宙に浮いたまま、どこに存在するのかも曖昧な様子である。

6. 翻訳比較

では、この内容を踏まえた上で、(X)馬の頭を永遠に向ける、(Y)馬が永遠に向かっている、2 種類の翻訳を比較検討していこう。5.1 で(X)訳、5.2 では(Y)訳の検討を行い、どちらの翻訳がより良い翻訳と言えるのか考察した上で、5.3 では 5 作品の細かい差異についても比較を行う。

6.1 (X)馬の頭を永遠に向ける

(I first surmised) the Horses' Heads / Were toward Eternity を直訳すると、「その馬の頭は永遠の方を向いていた」となるが、(a)、(b)、(c)の 3 作品はこれを意訳して、「（誰かが）馬の頭を永遠に向けた」と訳している。では誰が進行方向を馬に命令するのか、という疑問が浮かぶものの、どの訳でも主語が省略されているので答えは曖昧である。「死」か、「私」か、それとも第 2 連から第 5 連までの主語である「私たち」か、そのどれかであろう。

ここで、同じ文の surmised の主語が「私」で、直前の連の主語が「私たち」であることを考えると、(a)から(c)の日本語訳だけを読んだ場合、「私」または「私たち」が馬の頭を永遠に向けた（と私が最初に思った）という解釈になりやすくなる。しかし、語り手が意図的に馬車の方向転換をした、という解釈は、詩の内容から考えるとやや不自然である。第 4 節で示した通り、御者は「死」であり、語り手は自分を迎えに来てくれた「死」の馬車に乗せてもらった立場だ。したがって、語り手、すなわち「私」は、馬車を操る立場ではない。

さらに、この翻訳は限定的な解釈を促してしまう可能性がある。原文において、語り手の気持ちは具体的に描かれておらず、自身が死ぬことに対してどう思っていたのかも不明確である。しかし、語り手が馬車を自分自身で方向転換させた、と訳すと、まるで語り手が積極的に死に向かって行くようなイメージが構築されてしまう。ST で自由な解釈が許されていた部分が、翻訳によって解釈が狭められてしまうのであれば、それは良い翻訳とは言えないだろう。

[5] 蛇腹…建物の軒や壁の最上部に巡らした、突出部分のこと。

6.2 (Y)馬が永遠に向かっている

では、ほぼ直訳風に訳している(Y)訳の方はどうか。(Y)のように御者の存在を隠し、馬の進行方向だけを示せば、(X)と違って、目的地へ向かうことに積極的に語り手の意思が介在しているという解釈にはなりにくい。したがって、目的地は語り手の意思に関係なく、もともと決まっていた、ということになる。このように、(Y)の方が詩の解釈に矛盾を生じさせず、原文の自由な解釈をそのまま引き継いでいることを考えると、(X)よりも(Y)の方が詩の翻訳として適当である、と結論づけることができる。

6.3 5 作品の翻訳比較

次に、5 作品の細かい差異に着目しよう。まず、(X)グループの中でも、(a)は永遠を「指して」馬を「向かわせた」、としており、3 つの内最も使役の意味合いが強い。人が指を指して命令した、というイメージが鮮明に浮かび上がってくる。

さらに、3 作品を比べると、surmise の訳が、(a)信じた、(b)思った、(c)推測した、というようにそれぞれ異なっている。各動詞を辞書で調べて見ると、以下のように記してあった。

信ずる(信じる)：1. そのことを本当だと思う。疑わずに、そうだと思い込む。
思う：1. ある物事について考えをもつ。考える。判断する。信じる。
推測する：1. ある事柄をもとにして推量する。

（デジタル大辞泉）

これを見ると、(c)だけ少し意味合いが異なっていることが分かる。そして、「私」が馬車の方向転換をさせたとして、3 つの訳に主語を付け足して見ると、(c)だけ違和感の生じる訳になる。

(a) 永遠を指して馬を（私が）向かわせたと/私が最初に信じた
(b) 馬の頭を永遠に（私が）向けたと（私が）最初に思った
(c) ?永遠の方に向かって/馬の頭を（私が）向けたと私が最初に推測した

この違和感の原因は、「推測する」という動詞が、通例自分の意志的な行動に対して使用されないことにある。したがって、(X)という 1 つのグループの中でも、(c)は、馬に命令したのは「私」であるという解釈になりにくい。

また、原文と(Y)の 2 作品を比べると、語り手がいつ surmise したのか、ということについて違いが生じている。まず、原文では、直訳すると「その馬の頭は永遠の方を向いていたと思った」となり、馬の頭の向きについてだけ言及しているため、語り手がいつ考えを巡らせたのかは不明確である。しかし、(d)私の馬の頭が「永遠」に頭を向けたと信じた、では馬が目的地に頭を向けた瞬間、つまり出発の時点であることが示唆されている。一方、(e)馬は「永遠」に向かっているのだと/最初にわたしが思った、は馬が走っている瞬間、つまり馬車が進んでいる時点である。したがって、細かいことだが、(Y)グループの翻訳においても多少解釈の限定がある、ということになる。

7. まとめ

本稿では、Dickinson の詩‘Because I could not stop for Death — ’第 6 連最終 2 行について、日本語訳 5 作品の比較検討を行った。その結果、(1)詩の解釈に矛盾が生じない、(2)ST で解釈が複数可能な部分で自由な解釈ができる TT になっている、という 2 点から、(X)「馬の頭を永遠に向ける」よりも、(Y)「馬が永遠に向かっている」の方がより適当な翻訳である、と結論づけた。また、5 作品を比較した結果、(X)グループ内でも命令のイメージの強さが異なること、動詞 surmise の訳し方いよって馬に命令する人が変わること、さらに、(Y)グループ内でも解釈の限定が起きている、ということを示した。今回の比較対象は 5 作品にとどまったが、対象となる翻訳作品の数を増やし、時代による翻訳の変化について調査したい。

参考文献

Anderson, Charles R. (1960). *Emily Dickinson's Poetry : Stairway of Surprise*. Rinehart and Winston, New York.
エバウェイン, ジェイン D. (編) (2007). 『エミリ・ディキンスン事典』. 鵜野ひろ子(訳), 雄松堂, 東京.
Johnson, T. H. (Ed.) (1955). *The Poems of Emily Dickinson : Including Variant Readings Critically Compared With All Known Manuscripts*. 3 vols. Harvard University Press, Cambridge.
ジョンソン, T.H. (1985). 『エミリ・ディキンスン評伝』. 新倉俊一・鵜野ひろ子(訳), 国文社, 東京.
亀井俊介 (1998). 『対訳　ディキンソン詩集―アメリカ詩人選(3)』. 岩波書店, 東京.
萱嶋八郎 (1985). 『エミリ・ディキンスンの世界』. 南雲堂, 東京.
中島完 (1964). 『自然と愛と孤独と』. 国文社, 東京.
――― (1973). 『続自然と愛と孤独と』. 国文社, 東京.
――― (1983). 『続々自然と愛と孤独と』. 国文社, 東京.
――― (1994). 『自然と愛と孤独と　第４巻』. 国文社, 東京.
新倉俊一 (1967). 『ディキンスン詩選』. 研究社, 東京.
レア, ロバート L. (1993). 『エミリ・ディキンスン詩入門』. 藤谷聖和他(訳), 国文社, 東京.
谷岡清男 (1987). 『愛と孤独と』. 精興社, 東京.
武田雅子 (1988). 『エミリの窓から』. 蜂書房, 東京.
辻幸夫 (2002). 『認知言語学キーワード事典』. 研究社, 東京.

付録

(a) 中島完**(1964)**訳

私が「死」のために立ち止まれなかったので
「死」がこころよく立ち止まってくれた
馬車には私たち二人
そして「不滅」とだけ

私たちは緩やかに駆けた　彼は急ぐ様子もない
私はこの世の仕事も暇も
捨て去った
彼の親切に答えようとして

遊び時間に子供たちが輪になって群がる
学校を過ぎた
こちらを見つめている田畑を過ぎた
沈んでゆく太陽も越えた

あるいは太陽が私たちを越えていったのか
露は震えぞっとするように身体を寄せあった
なぜなら私のガウンは小蜘蛛の巣
私の肩掛けは薄絹の網

私たちは止まった
地面が幾分盛り上がったような家の前に
屋根は見えるか見えないかというほど
軒の蛇腹はただの土の塊り

それから何世紀がたったろう
だがその一つとて一日より短く思われる
永遠を指して馬を向かわせたと

私が最初に信じたあの一日よりも

(b) 新倉俊一**(1985)**訳
わたしが死のためにとまることができないので
死が親切にもとまってくれた
馬車はわたしたち二人きりと
それに「永遠」とで一杯だった

ゆっくりと一緒に乗り
彼はすこしも急がなかった
だけどわたしは放棄した　働くことも　暇も
彼の親切に応えるために

子供たちが休み時間に輪になって遊んでいる
学校を二人は通り過ぎた
目を瞠っている麦畑を通り過ぎ
沈んでいく太陽も通り過ぎた―

いや太陽が二人を通り過ぎた
露が冷たくふるえて集まった
わたしのガウンはクモの糸で
肩掛けは薄絹だった

やがて土がすこし盛りあがった
家らしい前で馬車をとめた
屋根はほとんどなく
なげしは土に埋もれていた

あのときから　何世紀もたっている
だが　なんと短く感じられることだろう
馬の頭を永遠に向けたと最初に思った
あの一日よりも

(c) 萱嶋八郎**(1985)**訳
私が死のために立ち止まれなかったので、
死が親切にも私のために立ち止まってくれた。
馬車は丁度私達と
不滅だけを乗せていた。

私達はゆっくり車を走らせた。彼は
急ぐことを知らなかったので、私は
彼の親切に答えて
仕事と余暇もまた片づけた。

私達は学校のそばを通った。そこで子供達は
休み時間に、輪になって争っていた。
私達は凝視する穀物畑を通った。
私達は沈む太陽を通った。

またむしろ太陽が私達を通っていった。
露が震えと悪寒をひきおこした。

なぜなら私のガウンは薄い紗に過ぎず、
私の肩掛けは網状の薄絹に過ぎないからだ。

土の盛り上がりだと
思える家の前に私達は止まった。
屋根は辛うじて見えたが、
軒蛇腹は土の上だった。

その時から数世紀たった。けれども
永遠の方に向って
馬の頭を向けたと私が最初に推測した
あの日よりも短く感じられる。

(d) 谷岡清男**(1987)**訳
私が「死」のために立ち止まってやれなかったので
「死」が親切にも立ち止まってくれた
馬車に乗っているのは私達二人と
「不滅」だけだった

私達はゆっくりと駆けた、「死」は全く急ぐ様子もなかった
それで、その心遣いに報いるために
私は仕事も余暇も
捨ててしまった

私達は学校を通り過ぎた
休み時間で子供達が輪になって押し合っていた
こちらを凝視している田畑も過ぎた
夕陽も通り過ぎた

いや夕陽の方が私達を追い越して行ったのだ
露玉は凍えてふるえながら身を寄せあった
私の上着はクモの糸だけだったし
私の肩掛けは薄絹の網だけだった

私達は地面が盛り上がったような
家の前で馬車止めた
屋根はほとんど見えず
軒の蛇腹は地に埋れていた

その時から何世紀もたった
なのに一日より短く思えるのだ
私の馬が「永遠」に頭を向けたと信じた
あの日よりも―

(e) 亀井俊介**(1998)**訳
わたしは「死」のために止まれなかったので―
「死」がやさしくわたしのために止まってくれた―
馬車に乗っているのはただわたしたち―
それと「不滅の生」だけだった。

わたしたちはゆっくり進んだ―彼は急ぐことを知らないし

わたしはもう放棄していた
この世の仕事も余暇もまた、
彼の親切にこたえるために—

わたしたちは学校を過ぎた、子供達が
休み時間で遊んでいた—輪になって—
目を見張っている穀物の畠を過ぎた—
沈んでゆく太陽を過ぎた—

いやむしろ—太陽がわたしたちを過ぎた—
露が降りて震えと冷えを引き寄せた—
わたしのガウンは、蜘蛛の糸織り—
わたしのショールは—薄絹にすぎぬので—

わたしたちは止まった
地面が盛り上がったような家の前に—
屋根はほとんど見えない—
蛇腹(じゃばら)は—土の中—

それから—何世紀もたつ—でもしかし
あの日よりも短く感じる
馬は「永遠」に向かっているのだと
最初にわたしが思ったあの一日よりも—